聖霊降臨後第１５主日（特定２０）　　不正な管理人のたとえ　　２０２２．９．１８．

今日の福音書は、「不正な管理人のたとえ」として有名ですが、特に理解がむずかしい話として、知られているものです。物語の中で、解雇を言い渡された管理人が、主人に対して負債のある者たちに、その負債額を減らしてやることが、とても印象的ですが、私たちを混乱させるのは、管理人の行動よりも、その不正によって、被害がさらに増えたはずの主人が管理人の抜け目のないやり方をほめたこと、そして、それ以上に、イエス様が弟子たちに向かって、９節で「そこで、わたしは言っておくが、不正にまみれた富で友達を作りなさい。」と、不正を勧めているようにとれる言葉が出てくることです。

神様は、人間の不正を、容認されるのでしょうか。少なくとも、今日の旧約聖書は、農民を苦しめる商人が「エファ升を小さくし、分銅は重くし、偽りの天秤を使ってごまかそう。」と言ったのを、神様が「わたしは、彼らが行ったすべてのことをいつまでも忘れない。」と言って批判されているのだから、やはり、不正をすること自体は良いとは思えません。しかしそれには目をつぶってでも、イエス様には言いたいことがあったのではないか、と思います。

それでは、話を理解するために、登場人物が誰のことなのかを整理してみましょう。
「金持ち」である主人が神様であるのは確かでしょう。「管理人」は、一人一人の人間でしょう。自分に当てはめてもいいでしょう。「主人に借りのある人」はどうでしょう。人はそもそもすべて神様に借りがあると言えるわけですが、文脈から「自分以外の人、自分の周囲の人」と理解しておきましょう。

管理人は、主人の財産を無駄遣いしていたのを主人からとがめられました。そして、そのあと、この管理人は、主人に借りのある人の負債を減らす、つまり主人の財産に、さらに穴をあけました。今まで管理人は、自分のために主人の財産を無駄遣いしていましたが、今度は他人のために主人の財産を無駄遣いしたわけです。ところが、そのような管理人の行動をこの主人は、今度はほめるのです。

つまりこのたとえは「神様から管理を任されたものを自分のために使えば責任を問われるが、他人のために使えばほめられる」というストーリーになっているようです。旧約聖書のほうは、悪い商人が、自分のために不正をするのを神様が批判されるので、決して福音書と矛盾していません。この商人が、他人のために不正をするなら、ほめられたかもしれないのです。

話を福音書に戻しましょう。イエス様はどうして、こんな話をされたのでしょうか。どうもこれは、それまでにイエス様が話されたお話と関係がありそうです。

今日の福音書の直前には、「放蕩息子」の話があります。この話では、息子が父親からもらった財産を使い尽くしましたが、今日の管理人が使ったのは、主人の財産でした。しかし、放蕩息子の父親も、今日の管理人の主人も、どちらも父なる神様を表しているので、似た様な話だと思います。私たちは、神様から、いろんなものをいただいているのに、それを無駄遣いして、結局は、それを与えた神様を悲しませているのではないか。放蕩息子の話では、強調点は、回心して、父の所へ帰る話でした。しかし、イエス様は財産の使い方の問題にも触れた方がよいと考えられたのでしょう。この放蕩息子の話は、ファリサイ派や律法学者に対して話されたのですが、弟子たちもこの話を聞いていたことでしょう。

今度は、イエス様は弟子たちに向かって話されています。財産をどのように考えるのか、もう少し話したかったのではないか、と思うのです。そして、この不正な管理人のたとえをイエス様が弟子たちに話している間、ほかの人たちもそれに聞き入っていたことが、聖書を読むとわかります。

このたとえは、１６章１３節までですが、それに続く１４節には、
「金に執着するファリサイ派の人々が、この一部始終を聞いて、イエスをあざ笑った。」とあります。

このファリサイ派に限らず、弟子たちも、お金に執着する人々が多かったのでしょう。でも、イエス様は、しばしば、自分の財産を捨てて、イエス様に従う弟子になるように勧める話をされています。

一連のこれらの話で、イエス様は、「お金とか、財産など、人々が執着しているものよりも、大切なものがあるんだ。今持っているものをすべて失うようなことがあっても、周りの人々を喜ばせるために努力した方がいい。そうすれば友達ができる。」ということだったのではないか、と思うのです。

このたとえ話を理解するために、当時の主人と管理人と主人に借りのある人々の関係について少し説明します。

先ず、主人ですが、この人は別の所に住んでいる不在地主で、時々土地を訪問する人なのか、あるいはこの地域の貴族なのか、直接は自分の財産を管理しないで、負債のある人々とはあまり顔を合わせていないのでしょう。社会のエリートなんでしょう。

それじゃ管理人はどうなのか。話の中で主人から解雇されるような話になっています。この人は決して主人の奴隷ではありません。主人から家のことを任された、主人の代理人。この人も特権階級に属する人です。主人に解雇されたら「土を掘る力もないし、物乞いをするのも恥ずかしい」と言っているのですから、直接畑で働くようなことはなかったし、そんな身分で生きていけるとも思えないのです。

主人に負債のある人たちはどんな人たちでしょうか。油を扱っている人は、オリーブ油などを作ることも考えられますが、それを売って商売をしている人かもしれません。麦の場合も同様でしょう。聖書注解者によっては、この人たちが証文を書き直すように管理人に言われているので、農業よりも文字を書き慣れている、商売をしている商人たちではないか、と主張する説もあります。

そして油１００バトスとか小麦１００コルというのは、大変な価値のある量で、減らしてもらった、油５０バトスとか小麦２０コルというのは、どちらもお金に換えたら５００デナリオン。まあ約５００万円くらいの減額ということになるようです。

この時の支配人の生活というのは、土地を農民に賃貸し、収穫物の輸出販売を商人に委託して、その仕事をする中で、高い利子を付けた貸し付けをしていたようです。そして、管理人は主人の利益を得ると共に、自分のふところにもそれを入れていて、もし農業の収穫の不作や、物品を運ぶ時の事故など、貸した相手が困った時など、借りている人たちには、主人ではなく、管理人が恨まれたりするし、それが主人への告げ口のようにして現れることもあるのです。

しかし、この管理人は、告げ口の通り、「無駄遣い」を実行するのです。主人からの借金を５００万円ずつ免除してやるわけです。そしてその証文を管理人は主人にみせるのですが、主人はそれを怒れない。

どうしてかと言うと、その証文の書き換えで、村では、主人がその地方で最も気高く寛大な人物だと称賛する祝宴が、もう始まっているだろうことを主人は悟ったのです。

主人は管理人をクビにすることもできます。あの証文は無効だと言うこともできるでしょう。しかしそうするなら、村の人々の喜びは怒りにかわり、農民たちの主人に対する評判は悪化するのです。

そこで主人は、管理人を復職させて、商人や農民の称賛と恩義を確実なものにすることができるのです。今回失った利子の損失は、このような、人々との信頼が続くなら、いつでも取り返せる、と主人は思ったのでしょう。

これはたとえ話ですが、イエス様はお金よりも大切なものを伝えたかったのではないか。

ちょっと誤解さるかもしれませんが、あえて言うと、神様という方は、自分が損をすることを全く気に留めない、寛容と言うか、いくらでも借金を引き受けるような方だと思ったらどうでしょうか。考えられないでしょうか。

主の祈りの後半で「罪」という言葉が出てきます。「わたしたちの罪をおゆるしください。わたしたちも人をゆるします。」というところですが、聖書では「負債」を表わす「負い目」と訳されています。「わたしたちの負い目を赦してください。わたしたちも自分に負い目のある人を赦しましたように。」という具合です。神様に負い目を押しつけて、私たちが自由になるのが信仰生活ではないでしょうか。

わたしたちには、洗礼を受けて救われても、なお罪を犯してしまう弱さがあります。そんな、いわば神様に負債のある私たちでも、周りの人々に対して「あなたの負債を、十字架に掛けられたイエス様に肩代わりさせてしまいなさい」と言って、人々の負債、重荷を下ろさせて、イエス様に負わせるのが、伝道ということではないかと、この物語を読みながら感じるのです。物語の管理人は、他人の負い目である、油１００バトスを５０に減らしたり、麦１００コロスを８０に減らして、それを主人に押し付けるのですが、神様は、自分に負債が増えることは喜びで、気にされない方だと思ったらどうでしょう。

自分に与えられたもの、管理を任されているものを、十分に使って、人を喜ばせて友達を作りなさい。それが神様をも喜ばせることになるんだ。だからその使命をあなたは果たしなさい、というのが、この奇妙なたとえ話の結論だろうと私は思います。

先祖のために自分に負荷をかけて、教団に献金させる統一教会とは逆ですね。わたしたちは、そんな負債を増やすことを赦されている者だ、ということを喜んで、神様や周りの人々との信頼を強め、人々を喜ばせる者でありたいと思います。